

親鸞における生死超越の視座
攝取心光常照護の特質

鍋島直樹

英文題目 Shinran's Perspectives on Transcendence of Birth and Death: The Characteristics of the Light of Compassion that Grasps Us Illumines and Protects Us Always, Naoki Nabeshima

序

生死輪廻を出離する道について親鸞が示した表現を一つひとつ顕彰し、その教学的根拠と意義をたずね、親鸞が生死の苦悩を超える道をどう指し示しているかを総合的に考察している¹。本論では、「信心あらんひと、むなく生死にとどまることなし」「金剛の信心ばかりにて ながく生死をすてはてて 自然の浄土にいたるなれ」「信心の珠をこころにえたる人は生死の闇にまどはざる」「弥陀の摂取の心光摂護してながく生死をへだてる」「生死のながき夜すでに暁になりぬ」「攝取心光常照護」に焦点を当てて、生死の闇に惑わされない宗教的生について解明したい。

一 信心あらんひと、むなく生死にとどまることなし

——如来の本願力を信じる人は、決して空しく生死輪廻の人生にとどまることはない。功德の宝海が本願を信じる人の心に満ち満ちて、煩惱の濁水にさえぎられることはない。

親鸞は、次のように記している。

本願力にあひぬれば　むなしくすぐるひとぞなき　功德の宝海みちみちて　煩惱の濁水へだてなし　如来浄華の聖衆は　正覚のはなより化生して　衆生の願樂ことごとく　すみやかにとく満足す（『高僧和讃』（十三）（十四）、『聖典全書』二・四一〇頁）

『浄土論』曰、「観仏本願力　遇無空過者　能令速満足　功德大宝海」とのたまへり。この文のころは、「仏の本願力を観ずるに、まうあうてむなしくすぐるひとなし。よくすみやかに功德の大宝海を満足せしむ」とのたまへり。「観」は願力をこころにかへみるとまふす、またしるといふころなり。「遇」はまうあふといふ、まうあふとまふすは本願力を信ずるなり。「無」はなしといふ。「空」はむなしくといふ。「過」はすぐるといふ。「者」はひとといふ。むなしくすぐるひとなしといふは、信心あらんひと、むなしく生死にとどまることなしとなり。……中略……「功德」と申すは名号なり、「大宝海」はよろづの善根功德満ちきはまるを海にたとへたまふ。この功德をよく信ずるひとのころのうちに、すみやかに疾く満ちたりぬとらしめんとなり。（『一念多念文意』、『聖典全書』二・六七五頁）

このように親鸞は、「本願力に遇えば、空しく人生が過ぎていくことはない。名号の功德が信じる人の心に満ちてくる」と明かしている。親鸞のこれらの言葉の教学的根拠には、天親の『浄土論』とともにその基盤となる『無量寿経』の教説がある。

たとひ世界に満てらん火をもかならず過ぎて、要めて法を聞かば、かならずまさに仏道を成じて、広く生死の流を濟ふべし。（『無量寿経』往觀偈、『聖典全書』一・四七頁、「信卷」引用、『聖典全書』二・九七頁）
仏弥勒に語りたまはく、それかの仏の名号を聞くことを得て、歓喜踊躍して乃至一念せんことあらん。まさに知

るべし、この人は大利を得とす。すなはちこれ無上の功德を具足するなりと。（『無量寿経』流通分、『聖典全書』一・六九頁、「行巻」引用、『聖典全書』二・四九頁）

こうした『無量寿経』に説かれる弥陀の誓願に支えられて、天親が『浄土論』に「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」（不虛作住持功德）と明かし、親鸞はそれらを承けて「本願力に遇うものは、空しく人生が過ぎることではない。信あるものは生死の迷いにどどまることはない」と明かしている。まず、『高僧和讃』（十三）の「本願にあひぬれば」について、親鸞は「遇はまふあふといふ、まふあふとまふすは、本願力を信ずるなり」（『一念多念文意』）と説明している。「煩惱の濁水へだてなし」とは、濁水が海にそそぐと海水と同一になるように、如来の本願を信ずると、煩惱がそのまま功德に転じられて一味になることを意味する。したがって親鸞は、「本願力を信ずれば、空しく人生を過ごす人はなく、空しく生死輪廻の世界を迷いつづけることはない。名号の功德を信じる人の心にその功德が満ちたりて、煩惱の濁った水で隔てられることはない」と明かしたことがわかる。次に、『高僧和讃』（十四）は、『浄土論』の「如来浄華の衆は、正覚の華より化生す」（眷属功德）、「衆生の願樂するところ、一切能く満足す」（一切所求満足功德）を典拠として作られている。注目すべきことは、「浄華」に関する親鸞の左訓である。高田専修寺国宝本にはこう記されている。

「浄華」の左訓 「ジャウクエトイフハアミダノホトケニナリタマヒシトキノハナナリ コノハナニシャウズルシ ユジャウハドウキチニネムブチシテベチノミチナシトイフナリ」（『聖典全書』二・四一〇頁）

解説すると、「浄華」といふは阿弥陀の仏になりたまひし時の華なり この華に生ずる衆生は同一に念仏して別の道なしといふなり」となる。すなわち、「浄華」とは阿弥陀仏が仏に成られた時の清らかな華であり、この華に生まれる聖なる衆生は同じ念仏の道を歩んだ同朋である」という意味である。ここより浄華とは、阿弥陀如来の仏に成られた

時の華であると同時に、衆生が共に念仏して浄土に往生して成仏する時の華でもある。阿弥陀如来の仏と成られた無上涅槃の華と、念仏の衆生が浄土往生をとげて仏と成る無上涅槃の華とは同体・同証の関係にあると親鸞は受けとめている。念仏者の浄土往生した正覚と、弥陀の正覚とが同じであることについては、『一念多念文意』にもこう示されている。

かならず安樂浄土にいたれば、弥陀如来とおなじく、かの正覚の華に化生して大般涅槃のさとりをひらかしむる
（『一念多念文意』、『聖典全書』二・六七七頁）

すなわち、大般涅槃は衆生の往生浄土の得果であるとともに、阿弥陀如来の妙果であると親鸞は教えている²。したがって親鸞は、「弥陀の浄土に生まれた聖なる衆生は、本願力の功德によって、阿弥陀仏と同じさとの華から化生する。浄土に往生すれば、衆生の一人ひとりの願いを満足させてくださる」と明かしていることがわかる。

二 弥陀の心光摂護して ながく生死をへだてける

――五濁悪世に住むわれらだからこそ、如来の願心より廻向されたダイヤモンドのような信心だけで、永久に生死の苦しみをすてはてて、ついに自然の浄土にいたることが成就する。金剛堅固の信心がさだまる時、阿弥陀如来の大悲の心光はわれらを迎え入れ、常に照護して、永遠に生死流転の迷いから離れられるようにしてくださった。

親鸞は次のように明かしている。

五濁悪世のわれらこそ 金剛の信心ばかりにて ながく生死をすてはてて 自然の浄土にいたるなれ 金剛堅固の信心の さだまるときをまちえてぞ 弥陀の心光摂護して ながく生死をへだてける（『高僧和讃』善導讃
（七六）（七七）、『聖典全書』二・四四三頁）

この『高僧和讃』（七七六）「五濁のわれらこそ……」は、善導の『観経疏序文義』の最後に説かれる「苦悩の娑婆、輒然として離るることを得るに由なし。金剛の志を発すに非ざるよりは、永く生死の元を絶たんや。」によったものであり、『高僧和讃』（七七七）「金剛堅固の信心の……」は、善導の『観念法門』護念増上縁の「但だ阿弥陀仏を専念する衆生有りて、彼の仏心の光常に是の人を照らして、撰護して捨てたまわず」によったものである。「金剛堅固の信心の さだまるときをまちえてぞ」とは、信心の決定する時と弥陀の心光照護の時とが同時であることを示し、金剛堅固の信心が決定する時をまつて、阿弥陀如来の大悲心からはなたれる光明におさめ護られ、永遠に生死流転の苦しみが無いようにしてくださつたと、親鸞が明かしているところである³。また、専修寺国宝本によれば、次のように親鸞の左訓が施されている。

「金剛堅固の信心」の左訓「シムノカタキケントイフ コヽロノカタキコトイフナリ」

「心光撰護」の左訓「オサメマモル ムゲクワウニヨライノオムコヽロニオサメマモリタマフナリ」（『聖典全書』二・四四三頁）

ここより金剛堅固の信心とは、信心の堅いことを意味し、阿弥陀如来の心光撰護を、無礙光如来の御心にいだかれて護られると親鸞が受けとめていることがわかる。このように無礙光如来のわれらを撰護する心の光にいだかれて、永遠に生死輪廻の苦しみから解き放たれると、親鸞は明かしている。

では、この「自然の浄土にいたるなれ」とはどういう意義を有しているのだろうか。「なれ」は、推測、伝聞の已然形、断定の已然形、命令形を示す助動詞である。この「自然の浄土にいたるなれ」の「なれ」は、推測、断定を意味し、如来の誓願が成就して、自然の浄土に必ず到達できることを力強く表現したものである。

また、親鸞は、『無量寿経』の「自然之所牽」の经文によりながら、「自然の浄土」についてこう説明する。

この眞実信をえたる人は大願業力のゆへに、自然に浄土の業因たがはずして、かの業力にひかるるゆへにゆきやすく、無上大涅槃にのぼるにきはまりなしとのたまへる也。しかれば「自然之所牽」とまふすなり。他力の至心信樂の業因の自然にひくなり。これを「牽」といふ也。「自然」といふは行者のはからひにあらざとなり。（『尊号眞像銘文』本、『聖典全書』二・六一頁）

ここより「自然之所牽」「自然の浄土にいたるなれ」とは、如来選択の願心より廻施された眞実信を獲得すれば、行者のはからひはもう必要でなくなり、本願他力のはたらきに自然に牽引され、導かれて、たやすく無上大涅槃の浄土に到達することができることを意味する。いみじくも『高僧和讃』善導讚に「信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり」（『聖典全書』二・四四六頁）と説かれているのも、誓願の本来的なたらきによって衆生に信が生まれ、もはや人間のはからひは一切必要とせずに、本願の自然なたらきによって必ず念仏成仏できることを明かしている。したがって阿弥陀如来は罪悪深重の凡夫を救うために、他力廻向の本願を成就し、金剛の信心を凡夫に回施し、凡夫は弥陀の本願を信じて、如来の願行を具足した南無阿弥陀仏の名号を称える時、現生で、阿弥陀如来に常に摂護された人生を歩むことができる。そして命終には、本願力によって、永遠に生死の苦悩をすてさり、如来の大願業力に自然にひっぱられて浄土に往生できる。このように親鸞は弥陀の大願業力のダイナミックなたらきに平生も臨終も導かれて、生死の苦悩を超えてゆけることを明かしたのである。

三 信心の珠をこころにえたる人は生死の闇にまどはざる

——信心の珠を心に得た人は、生死流転の闇に惑わされない。眞珠のような信心の珠の光が愚痴の闇をとりのぞき、迷いの只中にいる自己を明らかに照らしてくれる。

親鸞は次のように記している。

四明山権律師劉官讚「普勸道俗念弥陀仏、能念皆見化仏菩薩。明知、称名往生要術。宜哉源空 慕道化物、信珠在心、心照迷境、疑雲永晴、仏光円頂。建曆壬申三月一日」……中略……「念弥陀仏」とまふすは、尊号を称念すると也。「能念皆見化仏菩薩」とまふすは、「能念」はよく名号を念ずと也、よく念ずとまふすはふかく信ずる也。よく念ずとまふすはふかく信ずる也。……中略……「明知称名」とまふすは、あきらかにしりぬ、仏のみなをとなふれば「往生」すといふことを「要術」とすといふ。往生の要には如来のみなをとなふるにすぎたることはなしと也。……中略……「信珠在心」といふは、金剛の信心をめでき珠にたとへたまふ。信心の珠をこころにえたる人は生死の闇にまどはざるゆへに、「心照迷境」といふ也。信心の珠をもち愚痴の闇をはらひ、あきらかにてらすと也。「疑雲永晴」といふは、「疑雲」は願力を疑ふこころを雲にたとへたるなり、「永晴」といふは疑ふこころの雲をながく晴らしぬれば安楽浄土へかならず生るるなり。無礙光仏の攝取不捨の心光をもつて信心をえたる人をつねに照らしまもりたまふゆゑに、「仏光円頂」といへり。仏光円頂といふは、仏心をしてあきらかに信心の人の頂をつねに照らしたまふとほめたまひたるなり、これは攝取したまふゆゑなりとしるべし。（『尊号真像銘文』末、『聖典全書』二卷六三六―六三八頁）

「劉官」とは隆寛を指す。すでに先行研究で解明されているように⁴、この隆寛讚の漢文体の銘は、隆賢が法然の勧める念仏往生の教法を述べ、法然の自ら道を慕い苦悩の人々を教化するという「自行化他」⁵の徳を讃えたものである。これに対し、親鸞は、「信珠在心」について、珠のような信心を恵まれた念仏者は、その信心の珠の光のおかげで自らの愚痴の闇が破られると受けとめ、「仏光円頂」について、無礙光仏が大悲の光によって、信心の人の頂を常に照らしていると受けとめたのである。

この親鸞の独自の解釈が、生死の闇に惑わされない宗教的な生について明かしているので整理したい。『尊号真像銘文』の隆寛の銘によれば、隆寛は法然から、①「称名往生要術」の教えを学び、②「宜哉源空 慕道化物、信珠在心、心照迷境、疑雲永晴、仏光円頂」とあるように、法然が自ら称名念仏の道を慕い人々を導く際に、宝石のように煌めく信心の珠を心にそなえて、迷いや疑いを晴らし、法然の頭上には、仏や菩薩の頭頂から放たれる円かな光が浮かんでいたと法然の奇瑞を讃えている。それに対し、親鸞は隆寛の銘から、①「往生の要には如来のみなをとふるにすぎたることはなし」、②「信心のたまをこころにえたる人は、生死の闇にまどはざる」「信心の珠をもち愚痴の闇をはらひ、あきらかにてらす」「仏心をしてあきらかに信心の人の頂をつねに照らしたまふ」ということを法然の教説として受けとめている。このように如来より真珠のような信心の珠を心に恵まれた人は、生死の闇に惑わされない。信心の珠は本願を疑う心の雲を永遠に晴らし、念仏者を浄土に必ず往生させる。無礙光仏の攝取不捨の心光が信心をえた人を常に照らし護っていると親鸞は明かしている。

注目すべきことは、「信珠在心、心照迷境」という心の内側から照らす光のはたらきである。「信心の珠をこころにえたる人は、生死の闇にまどはざる」という表現が示すように、心の内側から真珠のように輝く信心の光が自己を照らしてくれるので迷いの闇に惑わされず、本願力を疑う心の雲を晴らすと親鸞が受けとっている。ここに如来よりたまわりたる信心が、心の内側から、迷いつづける人間の心の闇をはらう光の珠となり、私を迎え入れて決して見捨てない仏の光であると親鸞が受けとめていることがわかる。しかもそれだけではない。心の内側から信心の珠が自らの闇を照らすだけでなく、「仏心をしてあきらかに信心の人の頂をつねに照らしたまふ」と示されるように、信心の人の頂きから仏の光が常に照らしているとも親鸞は説いている。したがって仏の光は、如来より廻向された信心が珠玉の光を放って、心の内側から照らす光となり、わが心の闇に気づかせ、私をぬくめてくれる光であるとともに、仏

の心光は信心の人の頭上から私を照らし護っている光でもあることがわかる。

四 生死のながき夜すでに暁になりぬ

——弥陀の心光は迎えとって見捨てることがない。無礙光仏の心光は信心をえた人を常に照らし護ってくださいから、無明の闇は破られ、長かった迷いの夜に暁光が射してきた。すでに無明の闇が破られているが、貪り、怒りの雲や霧はいつも信心の天を覆っている。たとえ太陽と月が雲や霧に覆われようとも雲や霧の下には光が届いている。ちょうどそのように貪愛や瞋憎の雲や霧に信心が覆われても、その雲や霧を突き抜けて弥陀の心光が念仏者を明るく照らし護るから、念仏往生に障りはない。

この「撰取心光常照護」について、親鸞は「正信心仏偈」とそれを解釈した『尊号真像銘文』にこう記している。撰取の心光、つねに照護したまふ。すでによく無明の闇を破すといへども、貪愛・瞋憎の雲霧、つねに眞信心の天に覆へり。たとへば日光の雲霧に覆はるれども、雲霧の下あきらかにして闇なきがごとし。（『教行証文類』「行巻」 「正信心仏偈」、『聖典全書』二・六一頁）

「撰取心光常照護」といふは、信心をえたる人をば、無礙光仏の心光つねに照らし護りたまふゆへに、無明の闇はれ、生死のながき夜すでに暁になりぬとしるべしとなり。「已能雖破無明闇」といふは、このころなり、信心をうれば暁になるがごとしとしるべし。「貪愛瞋憎之雲霧常覆眞信心天」といふは、われらが貪愛・瞋憎を雲・霧にたとへて、つねに信心の天に覆へるなりとしるべし。「譬如日月覆雲霧雲霧之下明無闇」といふは、日月の、雲・霧に覆はるれども、闇はれて雲・霧の下あきらかなるがごとく、貪愛・瞋憎の雲・霧に信心は覆はるれども、往生にさはりあるべからずとしるべしとなり。（『尊号真像銘文』末、『聖典全書』二卷六五二〜六五

三頁)

さらに、『浄土文類聚鈔』「念仏正信偈」にも同様の内容が説かれている。

弥陀仏の日、あまねく照耀す。已によく無明の闇を破すと雖も、貪愛・瞋嫌の雲霧、常に清浄信心の天に覆へり。たとへばなほ日月・星宿の、煙霞・雲霧等に覆はると雖も、その雲霧の下明らかにして闇なきがごとし。信知するに日月の光益に超えたり。必ず無上浄信の暁に至れば、三有生死の雲晴る、清浄無礙の光耀朗らかにして、一如法界の真身顕る。(『浄土文類聚鈔』「念仏正信偈」、『聖典全書』二・二六七〜二六八頁)

ここで焦点を当てたいことは、「信心をうれば暁になるがごとし」という文の意義である。「暁」とは、『説文解字』七上に「明なり」とあり、晨明の義である。暁知とは、明知の義である。暁は太陽が昇った朝のような明るさではない。実際には、暁は太陽の昇る前のほの暗い頃である。闇が天地に広がっている状態で、東の水平線にかすかに陽の光が感じられる明るさである。暁とは明るさと暗闇との同時存在である。闇は闇としてありながら、暗闇の中に確かに光が射してくる。親鸞にとって暁を迎えた喜びが、「信心をうれば暁になるがごとし」という表現となり、弥陀に救われた感動、希望がそこに込められているといえよう。『浄土文類聚鈔』「念仏正信偈」には、「無上浄信の暁に至れば」と表現され、この上ない仏よりたまわった清浄な信心の夜明けを迎えると、生死の苦悩の雲が晴れると親鸞が明かしている。また特に、『浄土文類聚鈔』「念仏正信偈」には、『教行証文類』「正信念仏偈」にはない特徴的な表現がある。一つは、「念仏正信偈」では、「日月」に「星宿」が加えられていることであり、もう一つは、「雲霧」に「煙霞」が添えられていることである。「星宿」の譬えは、星が夜空の闇に煌めいていることを表す。「雲霧」に「煙霞」の譬えを添えることによって、上空に広がる雲霧だけでなく、低くたなびく煙霞に覆われても、日月の光は雲や霞をくぐり抜け、この世界を明るくすることを明確にしたのである。あたかも星や日月の光が世界の闇に

届くように、弥陀の摂取の心光が私の心の闇も、心を覆う暗雲も、心にどんよりたちこめる煙霞も突き抜けて、私の心を明るく照らしてくれることを表している。したがって「念仏正信偈」において、明るさと暗闇の同時体験、どんな暗闇にも仏の光が届いているという確かさを、親鸞が身近な自然風景に結びつけて実感的に表現したといえるだろう。

五 摂取心光常照護の典拠とその意義

では、親鸞が「摂取心光常照護」と説かれた典拠は何か。それは（1）『無量寿経』における弥陀の本願であり、（2）『観無量寿経』真身観の「一一光明遍照十方、念仏衆生摂取不捨」であり、直接的には、（3）善導の『観念法門』現生護念増上縁である。まず、親鸞は『尊号真像銘文』において、『無量寿経』の第十八願を解釈し、

この眞実信心をえむとき、摂取不捨の心光に入りぬれば、正定聚のくらゐにさだまるとみえたり。（『聖典全書』二・六〇五頁）

と受けとめている。また、親鸞は『尊号真像銘文』において、善導の『観念法門』摂生増上縁における第十八願理解を引用して、

ひごろ、かの心光に摂護せられまいらせたるゆへに、金剛心をえたる人は正定聚に住するゆへに、臨終のときにあらず、かねて尋常のときよりつねに摂護して捨てたまはざれば、摂得往生と申すなり。（『聖典全書』二・六二八〜六二九頁）

と受けとめている。これらの文が示すように、親鸞は『無量寿経』第十八願によりながら、弥陀の救いを「摂取不捨の心光に入りぬれば」「心光に摂護せられまいらせたる」として明かしていることがわかる。

次に、「撰取不捨」の表現自体は、『観無量寿経』真身觀に「一一光明遍照十方世界、念仏衆生撰取不捨」に説かれていた。この経文は、「阿弥陀仏の光明はひろくすべての世界を照らして、仏を念じる人々を残らずその中に撰め取り、見捨てることがない」⁷という意である。「撰護不捨」の表現自体は、善導の『観念法門』護念増上縁に「但有專念阿弥陀仏衆生 彼仏心光常照是人撰護不捨」と記されている。その善導の文言は、法然の『選択本願念仏集』にも引用される。

こうした聖典を典拠にして、親鸞は、撰護不捨の心光を次のように意義づける。

「但有專念阿弥陀仏衆生」といふは、ひとすぢにふたごゝろなく弥陀仏を念じたてまつるとまふす也。「彼仏心光常照是人」といふは、「彼」はかのといふ、「仏心光」は無礙光仏の御ころとまふす也。「常照」はつねにてらすとまふす、つねにといふは、ときをきはらず、日をへだてず、ところをわかず、まことの信心ある人をばつねにてらしたまふと也。てらすといふはかの仏心のをさめとりたまふと也。「仏心光」は、すなはち阿弥陀仏の御ころにおさめたまふとしるべし。「是人」は信心をえたる人なり。つねにまもりたまふと申すは、天魔波旬にやぶられず、悪鬼・悪神にみだられず、撰護不捨したまふゆへなり。「撰護不捨」といふは、おさめまもりてすてずと也。「総不論照撰余雜業行者」といふは、「総」はすべてといふ。みなといふ。雜行雜修の人をばすべてみなてらしおさめまもりたまはずと也。てらしまもりたまはずとまふすは、撰取不捨の利益にあづからずと也。本願の行者にあらざるゆへ也としるべし。しかれば撰護不捨と積したまはず。「現生護念増上縁」といふは、このよにてまことの信ある人をまもりたまふとまふすみこと也。「増上縁」はすぐれたる強縁となり。（『尊号眞像銘文』本、『聖典全書』二・六二九〜六三一頁）

「但有專念阿弥陀仏衆生」といふは、ひとすぢに弥陀仏を信じたてまつるとまふす御ことなり。「彼仏心光」と

まふすは、「彼」はかれとまふす、「仏心光」とまふすは、無礙光仏の御こゝろと申すなり。「常照是人」といふは、「常」はつねなること、ひまなくたえずといふなり。「照」はてらすといふ、ときをきはらず、ところをへだてず、ひまなく眞実信心のひとをばつねにてらしまもりたまふなり。かの仏心につねにひまなくまもりたまへば、弥陀仏をば不断光仏とまふすなり。「是人」といふは、「是」は非に對することばなり。眞実信樂のひとをば是人と申す、虚仮疑惑のものをば非人といふ。非人といふは、ひとにあらざるときらひ、わるきものといふなり。是人はよきひととまふす。「撰護不捨」とまふすは、「撰」はおさめとるといふ、「護」はところをへだてず、ときをわかず、ひとをきはらず、信心ある人をばひまなくまもりたまふとなり。まもるといふは、異学・異見のともがらにやぶられず、別解・別行のものにさえられず、天魔波旬におかさねず、悪鬼・悪神なやますことなしとなり。「不捨」といふは、信心のひとを、智慧光仏の御こゝろにをさめまもりて、心光のうちにときとして捨てたまはずと、しらしめんと申す御のりなり。「総不諭照撰、余雜業者」といふは、「総」はみなといふなり、「不諭」はいはずといふこころなり。「照撰」はてらしをさむと、「余の雜業」といふはもろもろの善業なり、雜行を修し、雜修をこのむものをば、すべてみなてらしおさむといはずと、まもらずとのたまへるなり。これすなはち本願の行者にあらざるゆへに、撰取の利益にあづからざるなりとしるべしとなり。この世にてまもらずとなり。「此亦是現生護念」といふは、この世にてまもらせたまふとなり。本願業力は信心のひとの強縁なるがゆへに、増上縁と申すなり。（『一念多念文意』、『聖典全書』二・六六七く六六八頁）

これらの文より、親鸞は「撰取心光常照護」を次のように意義づけている。まず、『尊号眞像銘文』の解釈によれば、①撰護不捨の心光は、無礙光仏の心光に常にいだかれていますぬくもり、安心を表す。仏心光とは、阿弥陀仏の御こころであり、無礙光仏の心光は、日時や場所に隔てられず、眞実信心の念仏者を常に照らし撰護している。②信心

のひとは是人である。摂護不捨の心光に護られて、天魔波旬という欲界の悪魔に侵されず、悪鬼・悪神に悩まされない。③雑行雑修のものを摂め護れない。なぜなら本願の行者ではないからである。④摂護不捨の心光は、現生護念増上縁である。無礙光仏はこの世界で信心ある人を照護する最上の力強い縁である。次に、『一念多念文意』の解釈によれば、上記の四点に加えて、⑤阿弥陀仏はその仏心に真信心の人を迎え、常に照護するから、不断光仏、智慧光仏とも表現される。⑥虚仮疑惑のものは非人、人でなく悪きものであるが、真実信樂のひとは是人、よきひとである。⑦無礙光仏の心光は、雑行雑修を好む人を照らし護れないと善導が教えるのは、本願の行者でないからである。摂取の恵みを雑行雑修の人は受け取ることができない。ここに親鸞は、弥陀の本願を信じる念仏者こそがよき人であると肯定的に讃え、この世界に生きる念仏者の存在価値が尊いことを明かしている。

六 摂取心光常照護の特質―心光の真意

親鸞における摂取心光常照護の特質を、先行研究の成果に学びながら解明したい。

(1) 色光と心光―摂取不捨と摂護不捨

本来、仏の光のはたらきは色光や心光として説かれる。色光とは、仏の身より十方に放たれる光明である。色光を示す典拠には、『観無量寿経』真身觀の「無量寿仏在有八万四千相：復有八万四千光明一一光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨」（『聖典全書』一・八七頁）の経文がある。この『観無量寿経』真身觀は、阿弥陀如来の八万四千の色光があらゆる世界を照らし、念仏衆生を摂取して捨てないことを明かしている。また、龍樹の『十住毘婆沙論』に

「身光智慧明かにして照らす所辺際なし」（「行巻」、『十住毘婆沙論』易行品引用、『聖典全書』二・一三三頁）と表現されるのも、仏の身から放たれた智慧の光明が明るく世界を照らし、どこまでも届いていくことを示している。心光とは、無礙光仏の大智大悲のはたらきによって分け隔てなく撰取る光のことである。心光を示す典拠には、『観無量寿経』真身觀の「仏心とは大慈悲これなり。無縁の慈をもつてもろもろの衆生を撰したまふ」（『聖典全書』一・八八頁）という経文がある。また、心光の典拠として、善導の『観念法門』護念増上縁の「但有專念阿弥陀仏衆生 彼仏心光常照是人撰護不捨」（『尊号真像銘文』に引用、『聖典全書』二・六二九頁、『一念多念文意』に引用、『聖典全書』二・六六六頁）があげられる。では、仏の色光と心光とは本質的に異なるのか。これについては先行研究が示すように、仏の色光も心光もその体は一つである。本来、色光も心光も本質的に阿弥陀如来の智慧と慈悲のはたらきであり、あらゆる衆生に光明が至り届いて救わんとするはたらきを示したものである。なぜなら、善導が「彼の仏の色光、常にこの人を照らして撰護して捨てたまわず」と説かれた文章は、『観無量寿経』真身觀の「一一の光明は遍く十方世界を照らし、念仏衆生を撰取して捨てたまわず」という弥陀の色光を説いた経文と「仏心とは大慈悲これなり。無縁の慈をもつてもろもろの衆生を撰したまふ」という弥陀の心光を明かした経文との両方に基づいているからである。さらに、『阿弥陀経』には、「彼の仏の光明無量にして、十方の国を照らすに障礙するところなし。この故に号して阿弥陀とす」（『聖典全書』一・一〇七頁）と説かれ、阿弥陀仏の光明を色光や心光として表現せず、十方世界を何ものにも妨げられることなく照らす光明としている。ここより、心光と色光の本質は、阿弥陀如来の智慧と慈悲を表し、同じであることがわかる。

(2) 撰取の心光という表現を尊重した真意

しかしながら、親鸞において身光の語が用いられるのは、『十住毘婆沙論』「易行品」の「西方善世界 仏号無量明 身光智慧明 所照無辺際」を「行巻」に引用する一箇所だけである。なぜ親鸞は、「摂取の心光」という表現を多用して尊重したのだろうか。その理由に関して、先行研究に慧眼を与えられた。まず、村上速水は『正信念仏偈讚述』において、色光と心光についてこう論じている。

光明は、色光すなわち物理的な光と、心光すなわち精神的な光とに分けられる。我々が具体的に認識できる光は物理的なもののみであり、精神的な光はその物理的な光に対する我々の認識を転用した譬喩あるいは象徴的な表現と考えられよう。例えば、世間的な場において、悩みが解決したことを目の前が明るくなったと表現し、仏教において法（真理）に対する無知が無明の闇と表現され、悟りの世界が光明で表現されるがごときである⁹⁾。

この論より気づかされたことは、色光は、我々が物理的、視覚的に認識されやすい光の譬えであるのに対して、心光は、悩みが解決して心に光が射してきたと表現されるように、心情的な喜びの実感を重んじた光の譬えであるということである。

次に、井上善幸は「親鸞の「摂取心光」理解について」の論文で、親鸞の光明観は、法然の光明観を承けながらも、その法然教学に厳しい論難を加えた、明恵（一一七三～一二三二）の光明観と深い関係があることを明かしている。井上善幸論文の主要な箇所を引用しておきたい。

明恵と親鸞は共に、摂取・不摂取は、阿弥陀仏の光明自体の性質によるのではなく、我々衆生の側に原因があるとするが、明恵が浄念の有無によって摂不摂を論じるのに対し、親鸞は本願力回向の信心と自力の執心によって摂不摂を論じている¹⁰⁾。

この論で気づかされたことは、親鸞が、摂取・不摂取は阿弥陀仏の光明自体の性質によるのではなく、我々衆生の側に原因があるとし、親鸞は本願力回向の信心と自力の執心によって摂不摂を論じているという点である。もう一度親鸞の文言に注目してみよう。「一切の群生、光照を蒙る」（「正信念仏偈」）「雑行を修し、雑修をこのむものをば、すべてみなてらしおさむといはずと、まもらずとのたまへるなり。これすなはち本願の行者にあらざるゆへに、摂取の利益にあづからざるなり」（『一念多念文意』）とあるように、阿弥陀仏の光明自体に摂取と不摂取があるのではない。阿弥陀仏の摂取を受けない原因は、本願を信じず、自らを頼みとし雑行雑修を好む人自身にある。したがって仏の摂取の心光は分け隔てなく照らしているが、雑行雑修の自力の心によって不摂取になり、ひとすじに本願を信じ念仏申すことによつて仏に摂取され、どこまでも護られることを親鸞は明かしているといえるだろう。

（3）無礙光仏の心光のはたらき

「摂取の心光」について、親鸞は次の用例が示すように、無礙光仏のはたらきと結びつけてと表現することが多い。「摂取心光常照護」といふは、信心をえたる人をば、無礙光仏の心光つねに照らし護りたまふゆへに、無明の闇はれ、生死のながき夜すでに暁になりぬとしるべし」（『尊号真像銘文』）、「仏心光」は無礙光仏の御こととまふす也」（『尊号真像銘文』）、「一念多念文意」、「摂取のひかりとまふすは、阿弥陀仏の御ことにおさめとりたまふゆへなり」（『唯信鈔文意』）、「聖典全書」二・七〇〇頁）「無礙の心光に摂護せられまいらせ候ゆへ、つねに浄土の業因決定すとおほせられ候」（『末灯鈔』一〇通、『聖典全書』二・七九二頁）。

このように親鸞は「摂取の心光」を「無礙光仏の心光」「無礙光仏の御こと」として解釈している。それはなぜか。その理由は、親鸞における仏の摂取不捨の心光は、さわりなき光であり、本願を信じる人の心にはたらき、何も

のにもさえぎられることなく救う仏の心光であるからである¹¹。

先行研究で明らかにされているように¹²、親鸞は、『無量寿経』や曇鸞『讚阿弥陀仏偈』によりながら、阿弥陀仏の正覚を十二光によって讚嘆する。『浄土和讃』や『弥陀如来名号徳』に十二光の意義が述べられ、それらを統括するものが「無礙光」である。「行巻」に「大行とは無礙光如来の名を称するなり」（『聖典全書』二・十五頁）と説かれているのはその証文である。また、親鸞は次のように明かしている。

ひとびとのおほせられてさふらふ十二光仏の御ことのやう、かきしるしてくだしまいらせさふらふ。……中

略……詮ずるところは、無礙光仏とまふしまいらせさふらふことを本とせさせたまふべくさふらふ。無礙光仏は、よろづのものゝあさましきわるきことにはさはりなく、たすけさせたまはん料に、無礙光仏とまふすとしらせたまふべくさふらふ。（『親鸞聖人御消息集』一八、『聖典全書』二・八四八頁）

ここに明らかなように、無礙光仏は弥陀の本願のはたらきを表す十二光の根本である。なぜなら無礙光仏は、世俗の悪をもともせず、すべてのものを平等に救う弥陀如来のはたらきを代表しているからである。したがって無礙光とは、あらゆる罪惡深重の凡夫を救済せんとする阿弥陀仏のはたらきの無障礙性、平等性をよく示している。

（4）撰取の心光は、瓦礫のようなわれらを分け隔てなく仏の心におさめとる

弥陀の撰取の心光の基本的はたらきとは何か。親鸞はこう明かしている。

「不簡貧窮将富貴」といふは、「不簡」はえらばず、きはらずといふ。「貧窮」はまづしく、たしなきものなり。「将」はまさにといふ、もつてといふ、率てゆくといふ。「富貴」はとめるひと、よきひとといふ。これらをま

さにもつてえらばず、きはらず、浄土へ率てゆくとなり。……中略……すべてよきひと、あしきひと、たふとき

ひと、いやしきひとを、無碍光仏の御ちかひにはきはらずえらばれずこれをみちびきたまふをさきとしむねとするなり。眞実信心をうれば実報土に生るとをしへたまへるを、浄土眞宗の正意とすとしるべしとなり。「総迎來」は、すべてみな浄土へむかへ率て、かへらしむといへるなり。（『唯信鈔文意』、『聖典全書』二・六九七頁）ひとすぢに具縛の凡愚・屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。具縛はよろづの煩惱にしばらくられたるわれらなり。煩は身をわづらはす、悩はころをなやますといふ。屠はよろづのいきたるものをころし、ほふるものなり、これはれうしといふものなり。沽はよろづのものをうりかうものなり、これはあき人なり。これらを下類といふなり。……中略……れふし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かはら・つぶてのごとくなるわれらなり。如来の御ちかひをふたごころなく信樂すれば、撰取のひかりのなかにをさめとられまゐらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまふは、すなはちれふし・あき人などは、いし・かはら・つぶてなむどをよくこがねとなさしめむがごとしとたとへたまへるなり。撰取のひかりと申すは、阿弥陀仏の御こころにをさめとりたまふゆへなり。（『唯信鈔文意』、『聖典全書』二・六九九〜七〇〇頁）

このように弥陀の撰取の心光は、弥陀の誓願を一心に信じて念仏する者を、貧富、善悪、尊卑賢愚に拘わらずべて迎え導き、浄土へ率いる。屠殺業者や商人をはじめ、煩惱を離れられない瓦礫のような人々すべてを仏が撰取して必ず大涅槃を開かせて、黄金のように輝く存在になさしめるといっているのである。

安藤光慈はこの『唯信鈔文意』の文意についてこう論じている。

ここで大切なことは「具縛の凡愚」を釈義される中で、「われらなり」と示されていることであろう。宗祖にとつて、具縛の凡愚・屠沽の下類とは自分自身のことであり、「簡」び捨てられるのは自分自身であった。それを

「不簡」すなわち簡び捨てられず、撰め取ってくださる無礙光仏の不可思議の本願であり、廣大智慧の名号なのである。：：中略：：瓦礫を金に変えることは本来不可能なことである。出離の縁なき衆生がさとりに至ることも本来不可能なことなのである。しかるに、如来の本願を二心なく信樂すれば、如来は撰め取って捨てたまわず、かならずさとりに至ることができ¹³。

このように出離の縁なき私が大涅槃を開くことができる、不可能を可能にさせる。それが弥陀の本願の心強さである。「不簡貧窮將富貴」「不簡多聞持淨戒」「不簡破戒罪根深」、これらが撰取の心光による平等な救済を具現化している。「不簡」とは嫌わない、よりわけしない、区別しないという意である。親鸞は「すべてよきひとあしきひと、たふときひといやしきひとを、無礙光仏の御ちかひにはきらわずえらばれず、これをみちびきたまふをさきとしむねとするなり」と記し、さらに「総迎來」を重視した。無礙光仏の誓願において、貧しきもの、富めるもの、清らかな戒を守るもの、戒を破る罪深きものなど、すべてのひとを嫌うことなく、差別することなく、一切衆生を導くことを志願とする。「不簡」も「総迎來」も、よりわけず、嫌わず、歓迎するという意であり、分け隔てなく迎える如来の心が示されている。

梯實圓は、撰取の心光についてこう明かしている。

心光とは、「無礙光仏のおんこころ」のことで、善悪・賢愚の隔てなく、万人を障りなく救いたまう阿弥陀仏の大智大悲の活動を光明というのである。私どもの目に見えるような、物質としての光ではないというので心光といわれたのである。いいかえれば、阿弥陀仏の光明は、目で見て確かめる物ではなくて、本願を聞いて心に信ずる仏心なのである¹⁴。

したがって撰取の心光は、①いかなる人も嫌わずよりわけせず救う。②弱く小さな石ころのようなわれら凡夫を

弥陀如来は最も大切にして迎えてくださる。③瓦礫が黄金になるように、不可能を可能にさせる。出離の縁なきものを迎えとり、大涅槃を開かせる。この世界の通常の論理では、悟りに至れず認められない私が、一心に本願を信じれば、仏の本願力によつて撰取され浄土に導かれると教えている。

(5) 撰取不捨の光と無明の闇―念仏者の生き方

生死の闇に惑わされない念仏者の生き方とは何か。眞実信心の念仏者は、無礙光如来の心光に常に撰護されて、無明の闇が破られ（「正信心仏偈」「念仏正信偈」）、無明の闇が晴れ、苦悩の長かった夜が暁になった（『尊号眞像銘文』）と親鸞は明かした。しかも貪りや怒りに覆われても、弥陀の心光が必ず撰取する。では、如来の大悲にいだかれて無明の闇が晴れた人生においては、もはや無明は消失するのであろうか。これについて村上速水がこう明かしている。

無明が破られると言われるが、決して無明がなくなるとは言われていない。そして、無明が破られるとは、その無明が往生の障害にならないという意味である¹⁵。

眞実信心の念仏者は、その人生において無明がなくなるのではない。無明煩惱があつても問題とならなくなるのである。では、無明煩惱があつても問題にならないとは、どういう生き方なのか。その宗教的な生き方とは、如来大悲の撰取の心光に照らされ護られているからこそ、おのれの嘘や偽りに向き合うことができるということである。

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず：：かかるあさましきわれら、願力の白道を一分二分やうやうづつあゆみゆけば、無礙光仏のひかりの御こころにおさめとりたまふ（『一念多念

文意』、『聖典全書』二・六七六頁)

と親鸞が告白したように、本願を信じる念仏者は、人生を歩む一足ごとが本願力の白道に支えられ、無礙光仏の大悲の光明に迎えられている。だからこそ心を据えて、無明煩惱に揺り動かされている自分自身を省みることが出来る。親鸞は、念仏者の生き方についてこう明かしている。

仏のちかひをききはじめしより、無明の酔ひもやうやうすこしづつさめ、三毒をもすこしづつ好まずして、阿弥陀仏の薬をつねに好みめす身となりておはしましあうて候ふぞかし。(『末灯鈔』二十通、『聖典全書』二・八一頁)

このように仏の光に摂護され、仏の誓願を聞き信じると、無明煩惱に向き合い、徐々に無明の毒を好まない身となり、弥陀の本願を薬にする生き方に成長する。自己の嫌な部分、暗黒面に気づいていくことこそ、弥陀の光に照護されて生きている証である。

「不簡貧窮将富貴」「不簡多聞持淨戒」「不簡破戒罪根深」と教えるように、本願に誓われた称名念仏の道は、僧俗、老若男女、富貴と貧窮を問わず平等に開かれている。もし智慧があつて多くを聞き学び、淨戒を保つ者を仏が照らすのであれば、智慧が少なく鈍感で、罪業深重なる凡夫は照らされなくなってしまう。摂取心光常照護は、弥陀の本願を信じる念仏者を摂護すると表現して、弱く小さな存在をすべて迎え護るといふ救いの平等性、広大性、ぬくもり、希望を伝える。親鸞の明かした生死を超える道は、自力を頼みとする傲慢さを棄てて、愚者に還り、弥陀の本願に帰すところに開かれ、闇の中に光が射してくる歓喜をもたらす。仏の心光は暁のように水平線の彼方からこの世界の闇の中に光を届け、たとえ無明煩惱の闇に覆われても、煩惱の雲や霞を突き抜けて私を照らし育む。如来廻施の信心の珠が心の内から私の闇を照らし慰め、本願力に自然に牽かれて必ず救われる。ひとすじに本願に帰す念仏者は、

如来の心光に照らされて己の無明煩惱に向き合い、本願を薬にして無明煩惱の毒を好まない生き方となる。差別や偏見、悲しみを超えて、分け隔てなく平等に救う、それが摂取心光常照護の根本にある仏の願いである。だからこそ自力を好む心を棄て、ひとすじに本願を信じて念仏申す時、差別を超えて弥陀の心光に照護される。こうして念仏者はその大悲の本願を聞いてわが身を省み、仏の願いを理想として、及ばずながら自他の安穩を志して生きていくことができるだろう。

註

- 1 拙稿「親鸞における生死の出離(一)——「生死いづべきみち」の意義」、『眞宗学』一二九・一三〇号、二〇一四年、「親鸞における生死の出離(二)——横超断四流の意義」、『眞宗学』一三七・一三八号、二〇一八年
- 2 安藤光慈著『唯信鈔文意講読』二九二頁、永田文昌堂、二〇一一年
- 3 前掲書八一頁参照。高木昭良著『三帖和讃の意訳と解説』二四八頁、永田文昌堂
- 4 普賢保之著『尊号真像銘文講読』二〇二頁、永田文昌堂、二〇一六年
- 5 法然『選択本願念仏集』の最後に「ここに貧道(源空)、昔この典(觀經疏)を披閱して、ほぼ素意を識る。立ちどころに余行を舍めてここに念仏に帰す。それよりこのかた今日に至るまで、自行化他ただ念仏を緯とす」とある。
- 6 白川静『新訂字統』二一一頁、平凡社、藤堂明保『学研漢和大辞典』、学習研究社、諸橋轍次『大漢和辞典』、大修館書店
- 7 『浄土三部経(現代語版)』一八四頁、本願寺出版社
- 8 普賢保之『尊号真像銘文講読』「色光と心光とは一往の区別であって、仏の光明は智慧の相であり慈悲のはたらきであるから、もともと光明の体は一つである」一六七頁、永田文昌堂、二〇一六年
- 9 村上速水『正信念仏偈讚述』五七〜五八頁、永田文昌堂、一九八五年
- 10 井上善幸「親鸞の「摂取心光」理解について」三二四頁、『眞宗学』一一二・一一三号、二〇〇五年。また、利井鮮明著『宗要論題決擇編』巻四に「不捨なれば権仮に非ず、何者権とは暫用還廢に名くるものなればなり。故に不捨とは実録究竟を顯はす意なること分明なり」(四十一丁)「理に依れば、摂取不捨は弥陀の名義功德にして、……生仏不二主伴相即

するの名義、即ち念仏衆生撰取不捨なればなり」(四十二丁、顕道書院、一九一〇年)とある。この論においても、撰取不捨は弥陀の救いのはたらきであり、阿弥陀仏は決して衆生を見捨てないのであるから、阿弥陀仏の光明そのものに撰取と

暫用還廢があるのではないと明かしている。

^{1 1} 安藤光慈『唯信鈔文意講読』「無礙光仏」は具体的にはたらいっている場であったり、障礙なき撰取不捨のありようを示すような場合に用いられる傾向があるように思われる」六九頁

^{1 2} 村上速水『正信念仏偈讚述』五八〜六四頁

^{1 3} 安藤光慈『唯信鈔文意講読』一二〇頁、一二二頁

^{1 4} 梯實圓『教行信証の宗教構造』三一六〜三一七頁

^{1 5} 村上速水 前掲書九八〜九九頁